

「もうれんぶね」

尾崎地区

丸森謙著「郷土むかしむかし」から

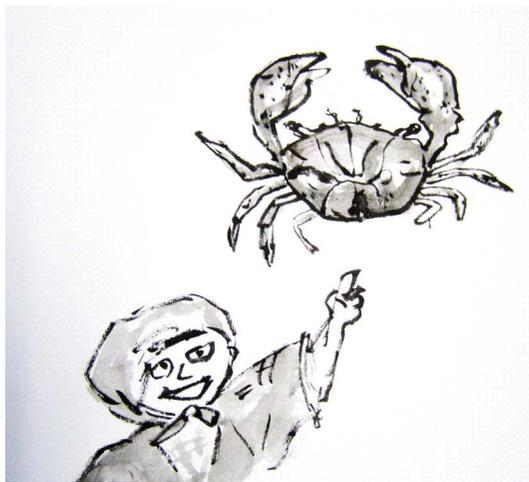
松岩に伝わる海の話だからきつと尾崎か片浜のことであろう。しかも、この東日本大震災の約百年前の「明治大海嘯」直後の話である。私見だが、世間で、平成二十三年三月十一日の大震災の大津波が、千年前の貞観の大津波と比較されていることに對して、大きな疑問を持ちたくなる。明治二十九年の「明治三陸大津波」が、何万もの命を奪っているのに、この百年前の津波をあまり取り上げず、千年前を強調するのはいかげなものか。千年前を強調すると、多くの人が、大津波が来るのは千年に一度であると認識してしまう。「百年に一度なんだ。それに、昭和にあった大海嘯のように、返しの地震と津波もあるのだ。油断するな。」という認識に立つことこそ、これまでの多くの被災者が教えてくれた教訓ではなかったか。明治の大海嘯にまつわる言い伝えが残っていた。話は尾崎の浜としよう。

明治の大津波の数年後のことである。浜の漁民の清吾は漁師仲間と四、五人で闇夜の沖に「ガニアカシ」に出た。

津波の後の数年は、海草が多く繁茂して魚介類が多くすみつくと言われている。全くそのとおりで、清吾の家でもこの年から漁もずいぶん増えた。額はわずかだったがかもしれないが、彼らにとっては大きい借金も、もう少しで返済できるところまできていた。心に余裕ができたのだらう、家の子どもたちにおやつがわりの毛ガニをとって食わしてやろうと思いついたのだ。「毛ガニは闇夜にかぎる」といわれる。月夜には、脱皮したり産卵したりで身がつまっているのだ。だから味はいきなり落ちる。しかし、春の毛ガニは雄も雌も、身がつまっていて実にうまいのだ。この、春の毛ガニを「ガニアカシ」と呼んでいた。

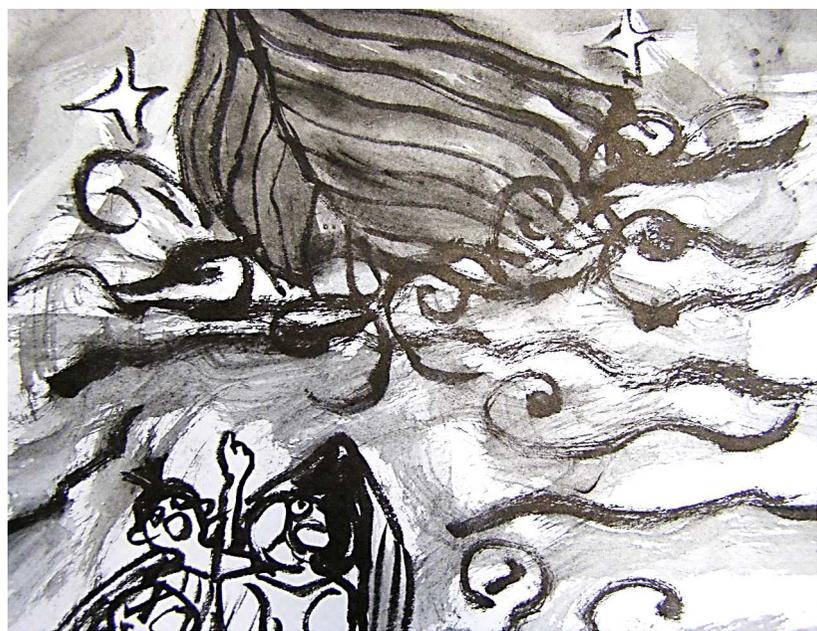
この夜は、春の大潮なのに、どうしたわけだか、潮が引く気配もなく、仲間には不思議がった。

「おい清吾、なんだが変でねえの。こんなに潮、引がないんでは蟹はとれねえっちゃ。何だか海も真っ暗だし、雨もふってきたし、ガニアガシやめて、帰んねえがぁ。」



と心細い声をかけた。他の仲間も同じことを言い出しそうな顔つきだった。清吾もそれにならずこうとした。その時だった。みな舟の前に、ぬううつと黒い船が浮かび上がってくる。みな息を止めてそれを見つめていた。そして、この船の不気味さに驚き、のけぞってしまった。真っ暗い中だが、よく目を見開くと、普通の船でないことはすぐに分かった。耳を澄ますと、その船の上の方から「カチャッ、カチャッ」と音が聞こえる。何か火打ち石でも打っているようだ。青白い小さな火花も見えた。清吾たちは声をひそめて、

「おい、おめだづ、あんな船、見だごどあるがい。」
と、互いに顔を見合わせた。当然あるはずもない。こんなことをしていた時だ。船から「ほいほい、ほいほい。」
と、こちらを呼ぶような声が聞こえてきた。



清吾たちは腰をぬかした。開いた口も閉じられなままだった。自分たちのガニアカシ舟をとにかく浜に上げ、逃げるようにおのおの家に帰り、布団の中でふるえながら眠りについた。

翌朝清吾は、飯を食いながら家のじいさまに昨夜のことを話した。するとじいさまは、烈火のごとくに怒り、清吾を叱りつけた。

「この大馬鹿ものが。よぐ生きて帰れだもんだ。そいづはなあ、モウレンブネと言って、幽霊船だぞ。そんなもんば見たら、あどは見ねで聞かねで、すぐそこがら逃げるごどだど。青白い光の次は、『ほいほい、ほいほい。旦那はんだち、今、この船底さ穴あいで水が入って来たがら、舟のひしゃく貸してけらいん。』と言ってな、逆に、人間の乗っている舟に水を入れて、沈めてしまうんだぞ。おめえだち、よぐ戻ってこれだなや。」

じいさまは、清吾の顔をしげしげと見た。

清吾たちは、朝のうちには浜辺に集まった。

「おらいのじいさまから聞いたら、あの船はおつかねえごどだが、幽霊船なんだと。大日如来様にお祈り申して、これがら、モウレンブネが尾崎の海に出て悪さばしねえように、拜んでみだいど思うだや。おめえ達も拜んでけらいんや。」

仲間の平佐がもの申した。
「ずっと大昔から海に出ていだ幽霊船だべ。出ねえようになんかできべが。それより、

モウレンブネの恨みばはらしたら、あどは未練なく成仏すんだいっちなあ」

みんなは平佐を支持した。村の古老に聞き回って、ついに一人がモウレンブネの由来を探し当てた。やはり大津波のことであった。こういうことだった。

江戸時代の中期、三陸に大津波があった。冬の夕暮れであった。たまたま漁に出ていた二艘の船が大津波にのまれた。浜助は、大波に包まれ、小舟ごとにもまれ、言葉にあらわせぬほどの恐怖の中にあつた。必死になって舟のへりにつかまり、やっとのことで命をとりとめようとしていた。相方の吾市は、波にはもまれなかったが、海底の岩に船底をぶつけたらしい。底板にひびが入って、海水が船いっばいにたまった。吾市は腰まで水につかったのだ。大波にもまれぬ吾市のほうが、むしろ強い恐怖を覚えていた。吾市は叫んだ。

「おおい、浜助、助けてくれ。船が沈みそうだ。」

「吾市、何言ってるんだ。おれば見ろ。首まで水につかって、体が冷たくなっている。おれこそ助けてけろ。」

そう答えた浜助には目もくれず、吾市は船の水をかき出そうとする。ちょうど目の前におけが流れてきた。陸から流されてきたのだらう。かじかんだ手でそれをつかむと、吾市は水をかき出し始めた。しかし、波に流され、もまれてもろくなっていたのか、桶はすぐ底がぬけてしまった。その反動で、吾市は海に放り出された。もがく吾市。と、水中で吾市の手が、何かをつかんだ。それは浜助の右足だった。浜助は、吾市を助けようと、小舟のへりにつかまりながらも自分の右足を差し入れたのだ。浜助は吾市ごと足を引き上げようとした。けれども重さがかかり、かえって自分の体が沈んでいく。吾市が死にもぐるいで浜助の足にしがみつくので、もうどうしようもない。この時だ。浜助の頭に親の言葉が浮かんだ。

「法華経のお題目を唱えよ。」

浜助は念じた。一方、吾市は親からこう言われていた。

「誰にもかまわず自分だけ助かれよ。」

運命の時はきた。何と、二人を再び大波が襲ったのだ。運命はだれにも決められない。



神仏のみが定め知ること。浜助は尾崎の砂浜に打ち上げられた。一方、吾市は海に深く飲まれた。

津波が明けて三年後。尾崎の浜は再び豊穡の海で活気づいていた。しかし、海に出た者が不思議な船に引き込まれ命まで落とすということが続いた。浜人たちは、その船をモウレンブネと言って恐れたという。しかし、明治には、こんな言い伝えも人々の記憶から薄れ、やがて消えていったようだ。

清吾らは、村の古老とはかって、大日如来像が奉られている村の社やしるの中に、漁師吾市の小さな供養碑を建てたとのことである。